



高橋教授の

この人に 会いたい

Vol.43

ゲスト

戸松義晴

氏

浄土宗心光院住職
公益財団法人全日本仏教会理事

葬儀の簡略化が指摘されて久しい。通夜、告別式、初七日の法要を、家族だけで行い、1〜2時間程度で済ませるケースも珍しくない。新型コロナウイルス感染症が拡大する中で、その傾向はさらに目立つようになってきている。一方で、「心の支え」として、宗教に期待する声はまだまだ大きい。こうした社会の変化と宗教の役割はどのように両立すべきなのか。浄土宗心光院住職で公益財団法人全日本仏教会理事を務める戸松義晴氏に話を聞いた。

激変する社会で「心の安定」に 役立つ仏教のあり方を追求する

お寺と社会の関係は
檀家から個人へ

高橋 近年、宗教離れが指摘されています。最近では仏教も葬儀が簡略化したり、檀家が縮小したりといった傾向があるようですが、どのように感じていますか。

戸松 日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団が2012年に発表した「ホスピス・緩和ケアに関する

意識調査」で、興味深い結果が出ています。「死に直面したとき、宗教は心の支えになるか」という問いに対して54・8%が「心の支えになると思う」と答えています。ところが、同じ調査で「死に直面した場合に心の支えになる人」について聞くと、「配偶者」「子ども」が突出して多く、「友人」「医師」などが続き、9番目によく「宗教者」が出てくるのです。仏教の教えには興味があるけれど、宗教者の存在が日常にない。また仏教の教えには興味があるけれど、お坊さんについては否定的な意見もあると思います。葬式の時に非常識な戒名料やお布施を要求されて嫌な思いをしたという人は少なくないと思います。浄土宗を開いた法然上人は「念仏さえ唱えれば極楽浄土へ往生できる」と説かれたのに、どうして高いお金を出して葬式をしたり戒名を付けたらしなければならぬのかと。一部の悪質なお坊さんが社会にそんな意識を植え付けたことがこういう結果に現れていると思います。高橋 確かに戒名についてはいろいろ



撮影＝安西美樹

の見解があるでしょうね。

戸松 私自身は、戒名がなければ成仏しないということはないと考えています。戒名は入信して信仰者になる時に付けるものです。それが本来の考え方なのですが、今は日常生活の中でお寺に来て一緒にお経を唱えることもなくなってきました。亡くなった時のみ故人に対してお坊さんに来てもらってお経をあげてもらい、良い戒名を付けてもらって——という人が増えてきています。残された人たちが「自分たちとしてはできるだけのことを

をした」と気持ちを落ち着かせる役割もあると思います。

高橋 今まではそういったことが代々伝えられていたけれど、薄れてきたということでしょうか。

戸松 かつては通夜から告別式を経るなかで、おじいさんが死んだ時にお経を読んでもらって気持ち落ち着いたといった経験ができたし、さらにさかのぼれば農村を基盤にした檀家制度があって、そうした体験を共有できる仕組みもありました。ところが今は皆、都会に出てきてそういう場もなくなってきました。

ました。亡くなる本人もご家族も、社会から引退していれば人付き合いも減っているから家族だけで見送るといったのが自然な形になっていきます。お通夜と告別式、初七日まで無理に開かなくてもいいだろうと考えるのは当然です。そうした社会の変化に今のお寺の仕組みが追いついていないこと、今まで受け継がれてきた伝統や習慣の意味を人々に伝えられなかったことが「宗教離れ」といわれる現象の一番大きな要因と考えています。

高橋 宗教そのものよりも宗教者

高橋 もう一つ、聞きたいのは今後の「老い方」「死に方」です。私は死ぬ前までは「こう生きたい」というのはかなり描けているのですが、死後のことまではさすがにイメージできません。なかには樹木葬とか海に散骨してほしいとい

**残される人たちと
相談して決めてほしい**

新型コロナウイルス感染症の拡大は 社会における宗教のあり方の変化に 拍車をかけている印象があります——高橋

う人もいますが、仏教的にはどう解釈するのですか。
戸松 「それをやったら罰が当たるといったことは言いませんし、そもそも仏教は形にこだわりません。本人が決めるべきことだと思います。ただ、本人が「こうしたい」というのは、残される人とも相談したうえで決めていただきたい。たとえば宇宙葬もありますが、ご家族が納得するならともかく、本人だけで決めてしまつては、残された人たちはどうお参りするの

といった戸惑いが出るでしょう。「私はひまわりが好きだから、お棺はひまわりで埋め尽くしてほしい」と言われても、冬に亡くなったらどうするんだと(笑)。仮にそれを叶えられなかったときに家族は「叶えてあげられなかった」と辛い思いをします。人は死を迎えたときに必ず誰かのお世話になるものです。それを考えて、関係性を築いておいていただきたいです。
高橋 自分の老い方、死に方だけでなく、残される人たちの思いも

高橋 泰

Tai Takahashi
国際医療福祉大学教授
たかはし・たい ●1986年、金沢大学医学部卒業。同年、東京大学病院第1第3第2内科・麻酔科で研修。92年、同大学医学部医学系大学院医学博士課程修了(医学博士)後、米国スタンフォード大学に留学。94年、ハーバード大学公衆衛生校に武見フェローとして留学。97年4月、国際医療福祉大学医療福祉学部医療経営管理学科教授。2016年9月より安倍内閣未来投資会議の構造改革徹底推進会合医療福祉部門副会長

高橋 ありがとうございます。
裏を返せばこの役割を果たせなければ宗教法人の公益性はないと判断される可能性もあるわけです。そうした意識をもって宗教者も社会のなかで活動していく必要があると思っています。



お寺との関係は檀家から一人ひとりの結びつきが大事になってくるでしょう——戸松

と社会の関係づくりが問われているのでしょうか。

戸松 お寺との関係は檀家から一人ひとりの結びつきが重要になってくるでしょう。医療と同じで、一人ひとりが自分でどう感じるかが大事なのです。私の祖父は、一家がキリスト教徒で本人も洗礼名をもらっている人から、どうしても頼まれてお経をあげていました。「俗名、聖マリアガブリエル……」と。宗教は家でなく人につくものだとつくづく思いました。

しかし各家庭で受け継がれるお墓なども忘れてはいけないと思います。個人の宗教に対する思いを尊重した上で、それを守りことも大切なことです。
高橋 新型コロナウイルス感染症の拡大は、そうした社会における宗教のあり方の変化に拍車をかけている印象があります。

戸松 今まで慣習として続けてきた伝統的な葬儀の形が大きく変わろうとしています。親戚縁者を大勢呼ぶことも、本当は止めたかっ

戸松義晴

Yoshiharu Tomatsu
浄土宗心光院住職
公益財団法人全日本仏教会
理事長
とまつ・よしはる ●1953年、東京生まれ。慶應義塾大学、大正大学大学院、ハーバード大学神学校において応用神学、生命倫理学を学び神学修士号取得。現在、浄土宗心光院住職、浄土宗総合研究所主任研究員、国際医療福祉大学特任教授、全日本仏教会事務総長、日本宗教連盟事務局長などを歴任し、2020年6月に全日本仏教会理事長。

たけれど、コロナ禍前はなんとなく遠慮して言い出せなかった。そこへ、コロナ禍が格好の口実を用意してくれたと言えます。今は感染拡大を防ぐために「三密を避けるために家族葬で済ませます」と。

宗教は社会のなかで役割を果たして存続する

高橋 私は現在61歳ですが、祖母の世代あたりはお寺に出かけて法話を聞くのを楽しみにしていました。母の世代になるとそれはありません。お寺と社会のかかわり方も変わってきたようです。
戸松 宗教は決して特別な存在ではなく、社会のなかで役割を担ってきたからこそ存続してきたものだと思います。裏を返せば、社会的役割がなくなつたものは例外なくなくなりません。それはお寺

も同じです。江戸時代は寺請け制度があつて公的な役割を担い、寺領も有していたのでお布施がなくてもお寺を運営できました。それが明治時代の廃仏毀釈、戦後の農地解放で寺領も取り上げられて、お布施なしでは寺を運営できなくなつたのです。そして今や、過疎化が進んで檀家制度自体を維持することも難しくなっています。
高橋 一方で最近では身寄りのない人が亡くなった場合、どうすれば良いのかわからないという話もよく聞きます。そうした人々にはどう接しようとしているのですか。
戸松 大阪の應徳院というお寺の住職である秋田光彦さんは終活支援をしていて、会員制で施設の紹介から亡くなった際の法要、遺品整理までワンストップサービスを始めています。当然、いろいろな業者と提携するのですが、その核にお寺がなっている例です。こうした役割をお寺はもつと担えるはず。身寄りのない人の死後のお世話をしたり、地域の困つた人を助けたりすることで社会的な存在意義も認めてもらえると思いま

大事なのです。

戸松 気持ちがあらぐというのは大きな意味があると思います。実は宗教法人は明確に公益法人であるという明確な法的位置づけはありません。第134国会(1995年11月2日)では「人の心を安定させる、あるいは人々の精神を安定させ、あるいは文化の向上を図る」ということになっています。ば、そういったことの中身からして公益に資するものであると私どもは考えているわけですが、「す」という政府答弁があります。裏を返せばこの役割を果たせなければ宗教法人の公益性はないと判断される可能性もあるわけです。そうした意識をもって宗教者も社会のなかで活動していく必要があると思っています。